



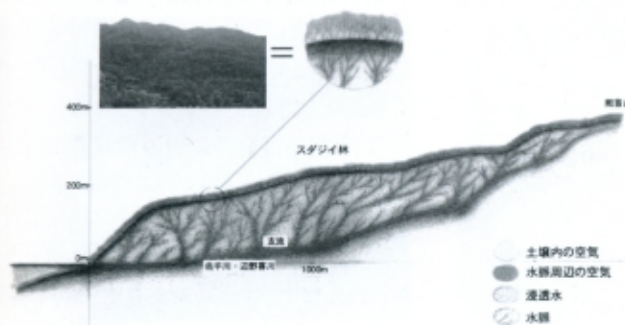
傷んだやんばるの森。木の先端のほうだけ葉が付いていて、下のはうは葉を落としている



畑周辺の改善前(2003年10月。写真左)と、「やんばる方式」で改善された同場所(2005年9月。写真右)

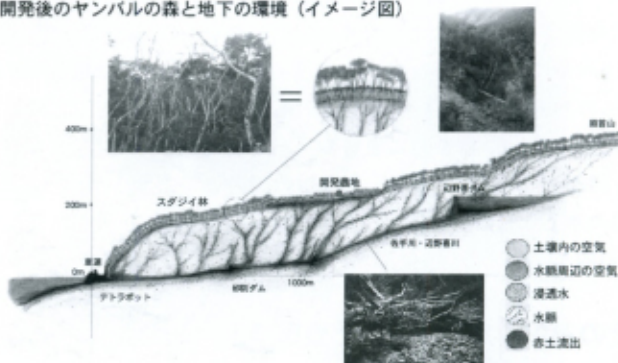


開発前のヤンバルの森と地下の環境 (イメージ図)



開発前のやんばるの森と地下の環境。健全な空気と水の流れを保っている (イメージ図。杜の会提供)

開発後のヤンバルの森と地下の環境 (イメージ図)



現在のやんばるの杜と地下の環境。全体的な大地の呼吸不良を来しており、最終末端での地表面で水や空気が動きにくくなっている (イメージ図。杜の会提供)

とか生態系がすべて入ってくるわけです。これを公共工事に生かすためには、膨大な資料が必要になります。

しかし「やんばるの森は傷んでいる。今何とかしなければ……」という思いは、県の職員の中でも上里さんには強いものがある。「僕も20数年前に国頭村に駐在していて、そのときは毎日山を歩いていた。そのときの僕の記憶では、山は恐ろしいものだという感じでした。樹木も威厳を誇っていたのです。木1本1本がどかっと根をおろして、少し木を切ると太陽の光が差し込むと、われもわれもと木々が枝を伸ばして、陽を奪い合うという迫力のある森でした。それから他の部局にいまして、11年ぶりにもどってきますと、確かに森の表情が変わってきたなと感じたのです」。

矢野智徳さんの認識と工法

なぜ、やんばるの森が傷んでいえるか。林業関連の人、生物学者の一般的な考え方は、新陳代謝が早い沖縄の樹木の特徴で、腐朽

(ふきゅう) 菌による樹木の老齢化が始まっているんだということだ。

ところが矢野さんは、この考えを真っ向から否定した。

やんばるの森では、木の先端のほうだけ葉が付いていて、下のはうは葉を落としている。これは「樹木自体が下から養分を引き上げる力を持っていない。真ん中の葉っぱを枯らしてやっと生きている状態」というのが矢野さんの意見だ。

最初は上里さんも納得できなかった。しかし、実際に矢野さんが手を入れた植物が元気になる。葉を落としている木の中央部から葉が出てくる。上里さん自身も、大学で林業を勉強しているし、専門技術員の国家資格を持っている専門家である。「樹木に関しては詳しくはないですけど、矢野さんのような力を持っている人に初めて会ったものですから、びっくりしました」。

では、矢野さんは、やんばるをどのように認識し、どのような方法で、再生を行ったのだろうか。ここは、彼(杜の会)のホームページ(<http://homepage2.nifty.com/morin->

okai/)から紹介したい。

「杜の会は、これまで各地の都会で、消えていく自然を見つめながら造園土木を中心に、植物に始まる生き物空間作りを手掛けてきた。この空間作りで最も重要なポイントは、生き物の呼吸が健全に確保されることである。そのためには、降った雨が大地に浸透し、大地を潤しながら新鮮な空気と混じりあって地面に抜けていく状態を施工として押さえることである。

この視点でこのやんばるを見つめた時、コンクリートづくめの都会とこの大地における水と空気の動き(大地の呼吸)には、よく似た点があると考えられる。それは、コンクリートを中心とした開発地周辺で泥水が発生し、植物を中心とした生き物が呼吸不良の症状を呈していることである。これは、先ず開発地の土の中ではコンクリートを始めとした重量物により水と空気の動きが低下し、次に水の抜ける排水施工は施されていても、空気が十分に抜ける通気施工がほとんど考